

平成30年度の 生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと 当面の課題について

平成30年10月23日



一般社団法人 **Jミルク**
Japan Dairy Association (J-milk)

1. 地域別生乳生産量の動向

【生乳生産量予測の前提】

・北海道及び都府県の予測値は、平成 30 年 8 月までの生乳生産量データに基づき、気温や乳牛頭数等を説明変数とした予測モデル（ARIMA モデル）による推計値を基本に算出。平成 30 年度の気温は、平年並みで設定。

なお、9 月の北海道の生乳生産については、北海道胆振東部地震の影響を加味するため、関係者ヒアリング等に基づき推計した。

表 1：平成 3 0 年度の地域別生乳生産量（見通し）

（千トン）

	全 国		北海道		都府県	
		前年比		前年比		前年比
4 月	624	101.2%	330	102.8%	294	99.5%
5 月	648	100.5%	347	102.2%	301	98.5%
6 月	621	101.1%	340	103.7%	281	98.0%
7 月	616	101.0%	345	104.1%	272	97.4%
8 月	607	101.0%	340	102.8%	267	98.8%
9 月	561	96.7%	301	95.4%	261	98.1%
1 0 月	595	99.0%	324	99.7%	270	98.2%
1 1 月	574	98.5%	311	98.8%	263	98.3%
1 2 月	603	98.7%	327	99.0%	276	98.2%
1 月	614	98.8%	332	99.1%	282	98.4%
2 月	564	99.0%	304	99.3%	259	98.7%
3 月	631	98.7%	339	99.6%	292	97.7%
第 1 四半期	1,893	100.9%	1,017	102.9%	876	98.7%
第 2 四半期	1,785	99.6%	985	100.9%	800	98.1%
第 3 四半期	1,772	98.7%	963	99.2%	809	98.2%
第 4 四半期	1,808	98.8%	975	99.3%	833	98.3%
上期	3,677	100.3%	2,002	101.9%	1,676	98.4%
下期	3,580	98.8%	1,938	99.2%	1,642	98.2%
年度計	7,257	99.5%	3,939	100.6%	3,317	98.3%

※表は、着色部分が実績、白枠部分が予測（平成 30 年 9 月以降）。以下、全て同様。

【生乳生産量の見通し】

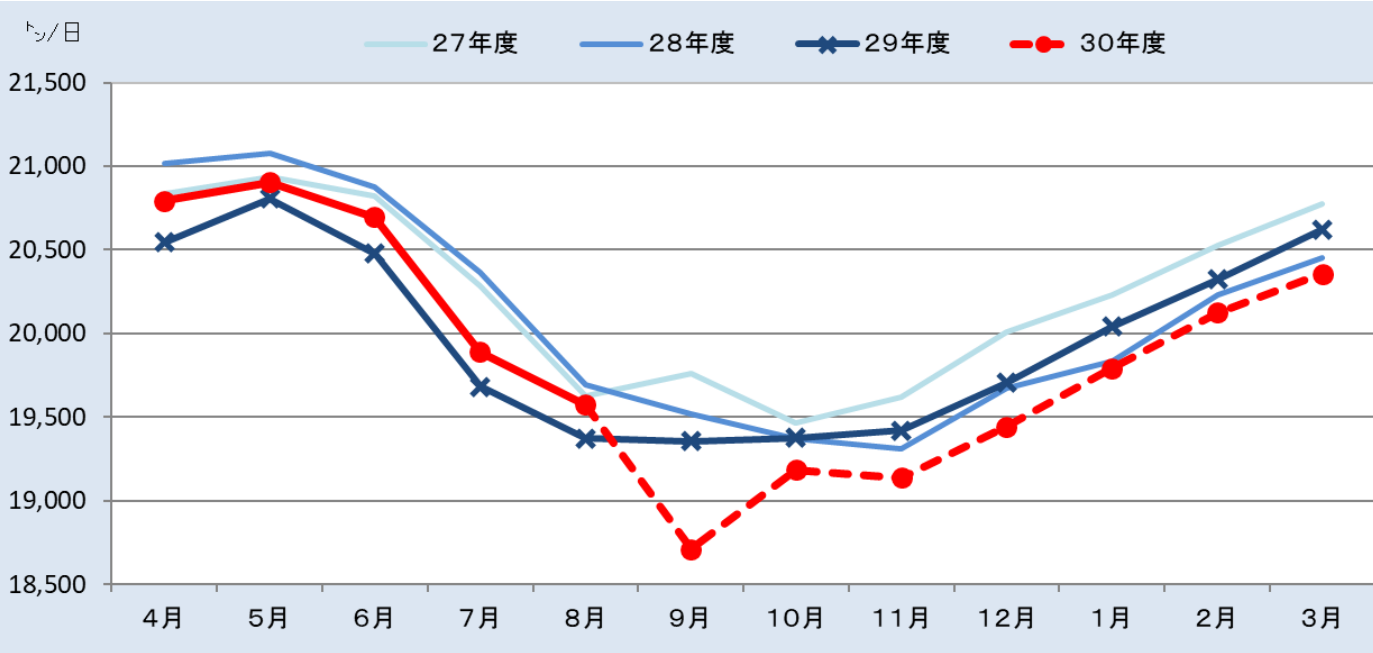
30 年度の生乳生産量は、北海道では 3,939 千トン・前年比 100.6%、都府県では 3,317 千トン・同 98.3%となり、その結果、全国の生乳生産量は 7,257 千トン・同 99.5%となる見通しである。

北海道の生乳生産について、北海道胆振東部地震及び全道停電の影響に伴う生乳廃棄などにより、9 月は 301 千トン・同 95.4%と、前回見通し（319 千トン・同 101.3%）より 18 千トンの減少を見込んでいる。震災の影響に伴い、大幅な減少が懸念されたものの、生産量は回復してきており、下期は 1,938 千トン・同 99.2%と、前回見通し（1,955 千トン・同 100.2%）より 17 千トンの減少にとどまる見通しである。

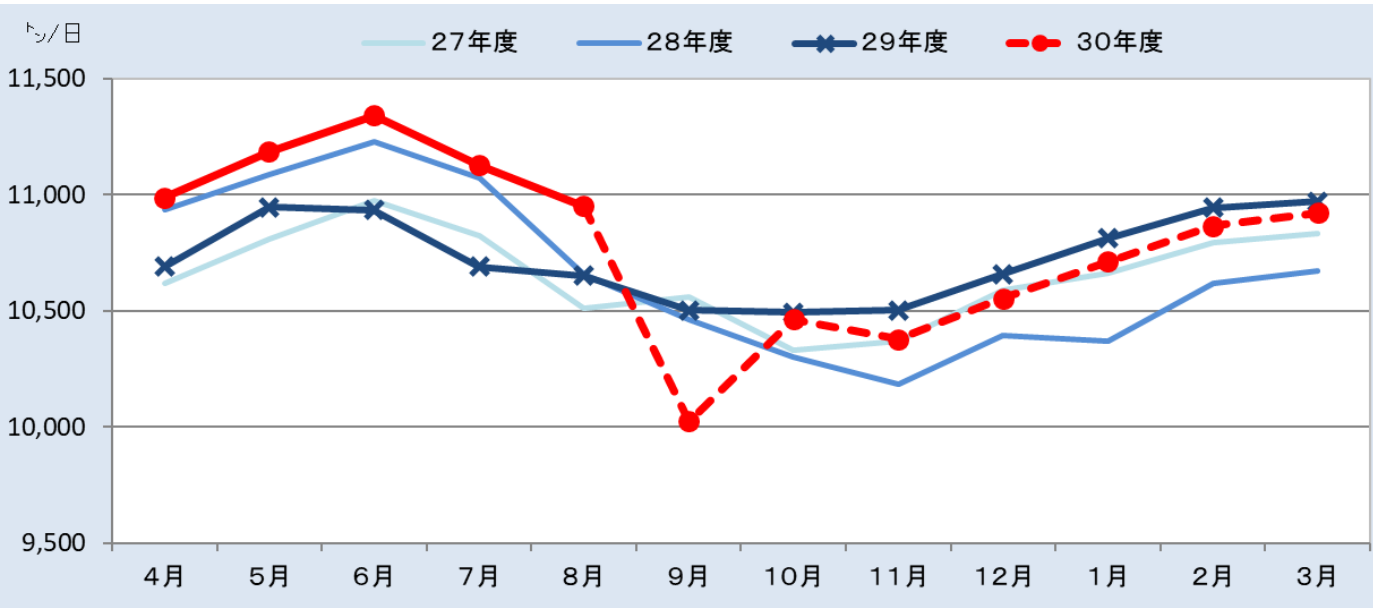
また、都府県においては、7 月の記録的な猛暑による生産量への影響が懸念されたものの、8 月以降は暑さが和らいだこともあり、下期は 1,642 千トン・同 98.2%と、前回見通し（1,630 千トン・同 97.5%）より 12 千トン増加する見通しである。

※全国	7,257 千トン・ 99.5%	（前回 7/27 見通し	7,266 千トン	99.7%）
北海道	3,939 千トン・100.6%	（同	3,966 千トン	101.3%）
都府県	3,317 千トン・ 98.3%	（同	3,300 千トン	97.8%）

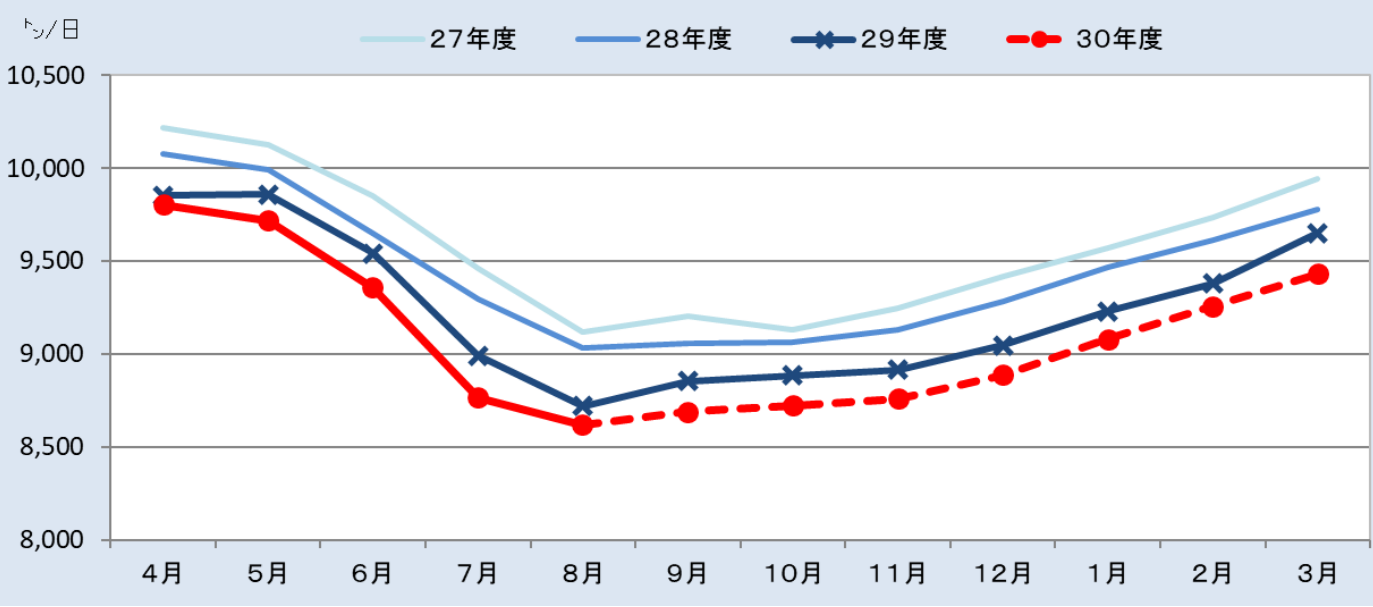
グラフ 1－1：全国の生産量（日均量）



グラフ 1－2：北海道の生産量（日均量）



グラフ 1－3：都府県の生産量（日均量）



2. 牛乳等生産量の動向

【牛乳等生産量予測の前提】

- ・各々の予測値は、平成 30 年 8 月までの生産量データに基づき、気温や平日日数等を説明変数とした予測モデル（ARIMA モデル）による推計値を基本に算出。平成 30 年度の気温は、平年並で設定。
- ・なお、9 月の各生産量については、北海道胆振東部地震の影響を加味するため、関係者ヒアリング等に基づき推計した。

表 2：平成 30 年度の牛乳等生産量（見通し）

	牛乳類		牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料		はっ酵乳	
		前年比		前年比		前年比		前年比		前年比		前年比
4 月	380	98.9%	252	101.0%	7	92.3%	27	93.1%	93	95.8%	93	101.7%
5 月	410	99.7%	278	103.7%	7	93.8%	28	92.5%	97	92.0%	95	100.2%
6 月	405	99.0%	275	103.1%	7	91.9%	27	89.9%	96	91.7%	93	100.3%
7 月	414	98.9%	274	103.0%	7	95.5%	30	91.5%	103	91.5%	92	99.8%
8 月	394	98.7%	254	102.8%	8	102.6%	29	91.1%	103	91.7%	89	100.3%
9 月	402	96.5%	273	100.3%	8	107.9%	19	61.3%	103	95.9%	89	98.3%
1 0 月	405	99.0%	276	100.5%	8	108.7%	27	89.8%	95	96.9%	90	101.0%
1 1 月	381	99.0%	266	101.7%	8	102.3%	27	97.7%	81	90.8%	85	99.4%
1 2 月	363	98.1%	253	101.4%	9	103.0%	26	97.3%	75	88.2%	83	98.3%
1 月	360	96.8%	253	99.9%	8	100.8%	25	95.9%	74	87.5%	87	98.6%
2 月	342	97.8%	242	101.2%	7	98.5%	24	95.4%	69	88.4%	83	101.3%
3 月	364	97.3%	250	101.4%	8	95.6%	26	95.7%	79	86.7%	94	100.7%
第 1 四半期	1,195	99.2%	806	102.6%	22	92.7%	82	91.8%	285	93.1%	281	100.7%
第 2 四半期	1,209	98.0%	800	102.0%	23	101.9%	77	81.7%	309	93.0%	271	99.5%
第 3 四半期	1,150	98.7%	795	101.2%	25	104.5%	80	94.8%	250	92.2%	258	99.6%
第 4 四半期	1,066	97.3%	746	100.8%	23	98.2%	75	95.7%	222	87.5%	264	100.2%
上期	2,404	98.6%	1,606	102.3%	44	97.2%	160	86.6%	594	93.0%	552	100.1%
下期	2,216	98.0%	1,540	101.0%	48	101.4%	155	95.2%	473	89.9%	523	99.9%
年度計	4,620	98.3%	3,146	101.7%	92	99.3%	314	90.6%	1,067	91.6%	1,074	100.0%

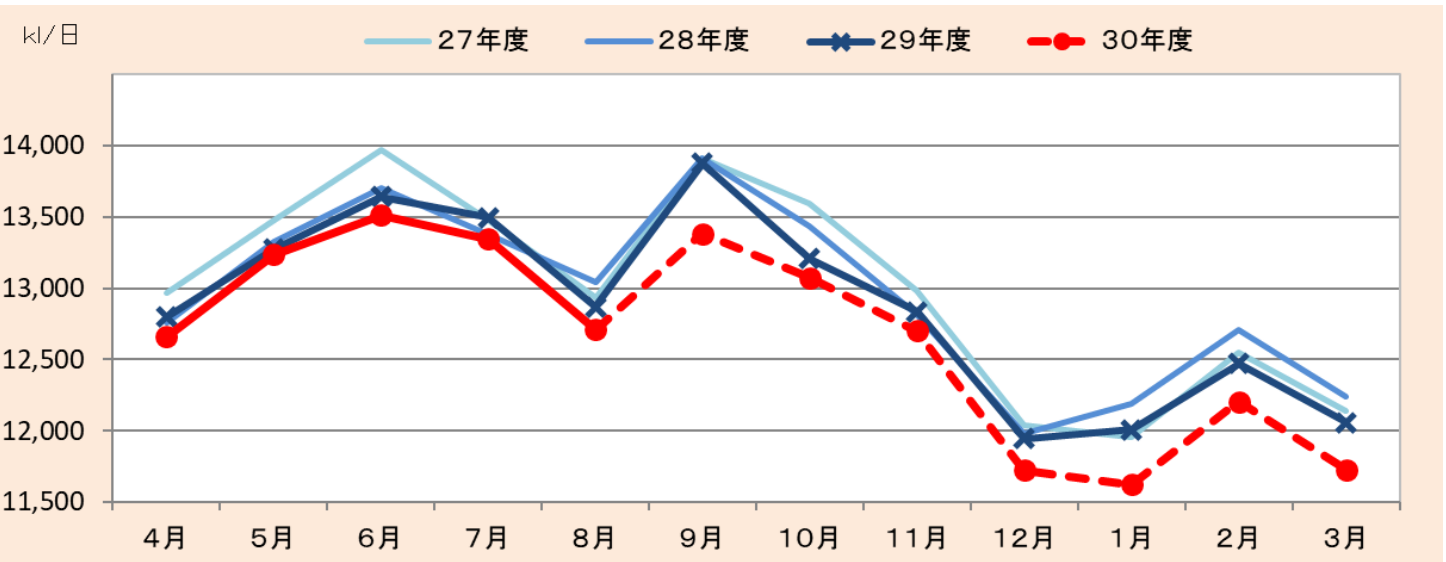
【牛乳等生産量の見通し】

30 年度の牛乳等生産量は、「牛乳類」が 4,620 千 K1・前年比 98.3%、「はっ酵乳」が 1,074 千 K1・同 100.0%となる見通しである。

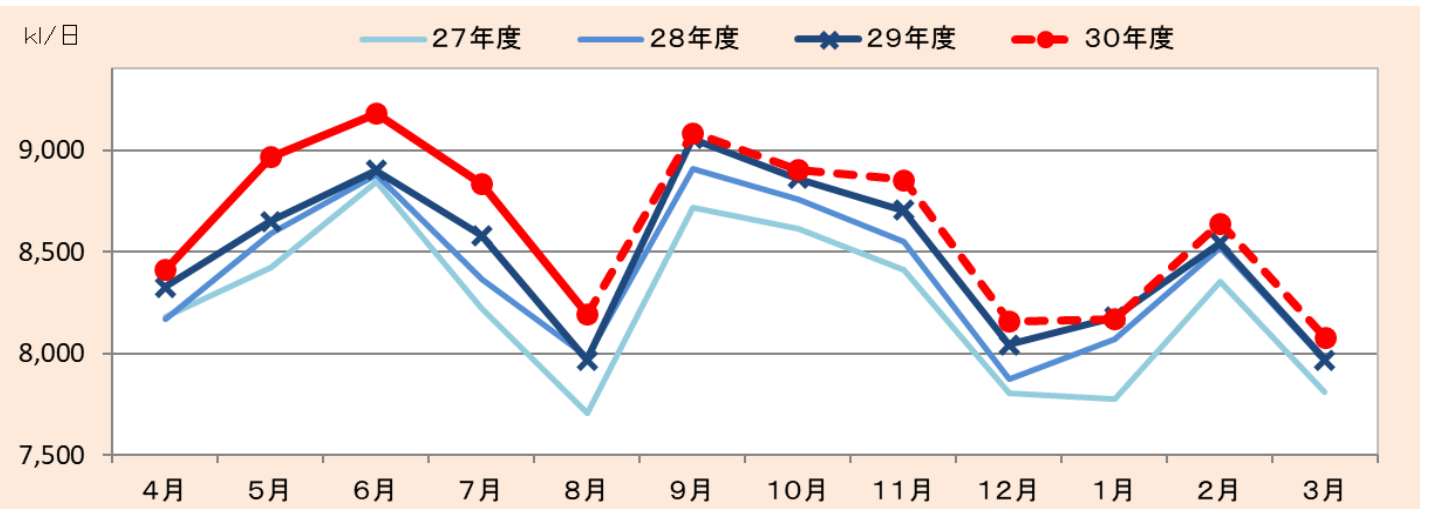
北海道胆振東部地震や複数の大型台風の影響に伴い、9 月の牛乳類の生産量は 402 千 K1・同 96.5%と、前回見通し（419 千 K1・同 100.6%）より減少した。製造品目集約の動きにより、特に成分調整牛乳が大きく減少した。これらの動向は震災後の混乱による一過性のものと見込まれ、今後は徐々に従来のトレンドに戻る見通しである。

※牛乳類	4,620 千 K1・98.3%	（前回 7/27 見通し	4,681 千 K1・99.6%）
牛乳	3,146 千 K1・101.7%	（同	3,152 千 K1・101.9%）
加工乳	92 千 K1・99.3%	（同	88 千 K1・94.4%）
成分調整牛乳	314 千 K1・90.6%	（同	332 千 K1・95.8%）
乳飲料	1,067 千 K1・91.6%	（同	1,109 千 K1・95.2%）
はっ酵乳	1,074 千 K1・100.0%	（同	1,081 千 K1・100.6%）

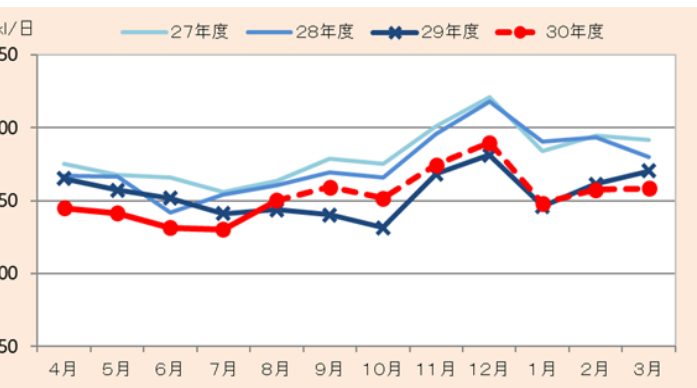
グラフ 2－1：牛乳類（牛乳・加工乳・成分調整牛乳・乳飲料）の生産量（日均量）



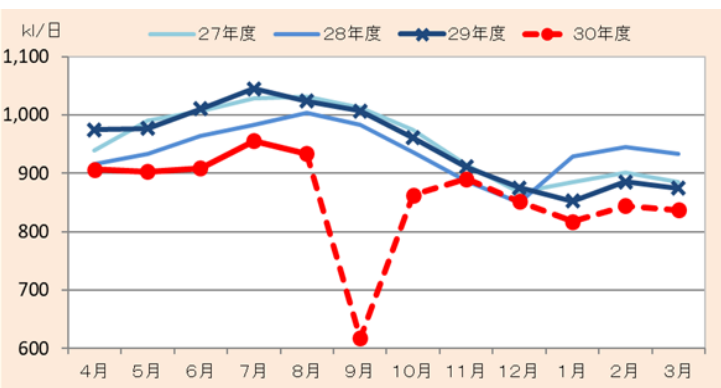
グラフ 2－2：牛乳の生産量（日均量）



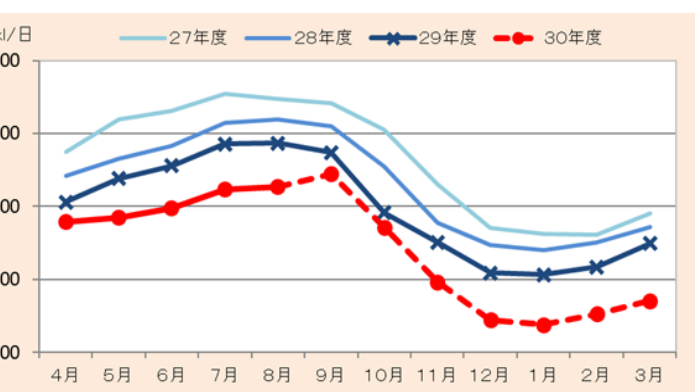
グラフ 2－3：加工乳の生産量（日均量）



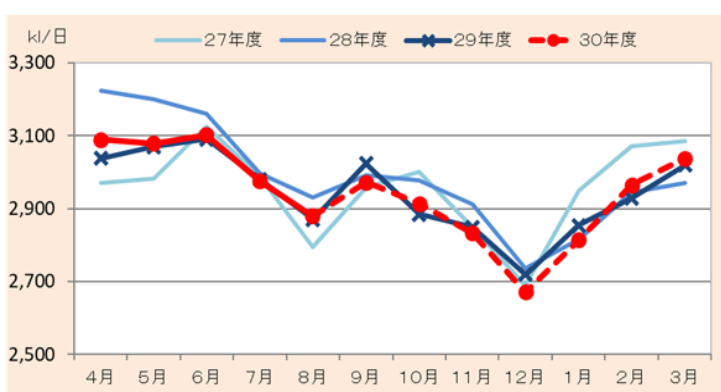
グラフ 2－4：成分調整牛乳の生産量（日均量）



グラフ 2－5：乳飲料の生産量（日均量）



グラフ 2－6：はっ酵乳の生産量（日均量）



3. 用途別処理量の動向

【用途別処理量予測の前提】

- ・生乳供給量は、生乳生産量から自家消費量を差し引いて算出（自家消費量は、各地域の直近までの動向を踏まえ設定）。
- ・飲用等向処理量は、牛乳、加工乳、成分調整牛乳、乳飲料、はっ酵乳の予測生産量を基に、生乳使用係数を乗じ算出。
- ・乳製品向処理量は、生乳供給量と飲用等向処理量の差。

表3：平成30年度の生乳供給量及び用途別処理量（見通し）

（千トン）

	生乳生産量		自家消費量		生乳供給量		飲用等向		乳製品向	
		前年比		前年比		前年比		前年比		前年比
4月	624	101.2%	4	98.4%	620	101.2%	331	99.7%	289	103.0%
5月	648	100.5%	4	96.9%	644	100.5%	361	101.6%	283	99.1%
6月	621	101.1%	4	100.0%	617	101.1%	359	101.5%	258	100.5%
7月	616	101.0%	4	101.4%	612	101.0%	357	100.8%	255	101.4%
8月	607	101.0%	4	101.0%	603	101.0%	341	101.7%	262	100.2%
9月	561	96.7%	4	96.6%	557	96.7%	345	96.7%	212	96.6%
10月	595	99.0%	4	98.7%	591	99.0%	356	100.2%	235	97.3%
11月	574	98.5%	4	98.4%	570	98.6%	342	101.4%	228	94.6%
12月	603	98.7%	4	98.6%	599	98.7%	327	101.3%	271	95.7%
1月	614	98.8%	4	98.9%	610	98.8%	329	98.8%	281	98.7%
2月	564	99.0%	4	99.3%	560	99.0%	311	100.1%	249	97.7%
3月	631	98.7%	4	99.0%	627	98.7%	327	99.8%	300	97.5%
第1四半期	1,893	100.9%	12	98.4%	1,880	100.9%	1,051	101.0%	829	100.9%
第2四半期	1,785	99.6%	12	99.6%	1,772	99.6%	1,043	99.7%	729	99.5%
第3四半期	1,772	98.7%	12	98.6%	1,759	98.7%	1,025	100.9%	734	95.8%
第4四半期	1,808	98.8%	12	99.1%	1,796	98.8%	967	99.6%	830	98.0%
上期	3,677	100.3%	25	99.0%	3,653	100.3%	2,094	100.3%	1,559	100.2%
下期	3,580	98.8%	24	98.8%	3,556	98.8%	1,992	100.3%	1,564	97.0%
年度計	7,257	99.5%	49	98.9%	7,208	99.5%	4,086	100.3%	3,123	98.6%

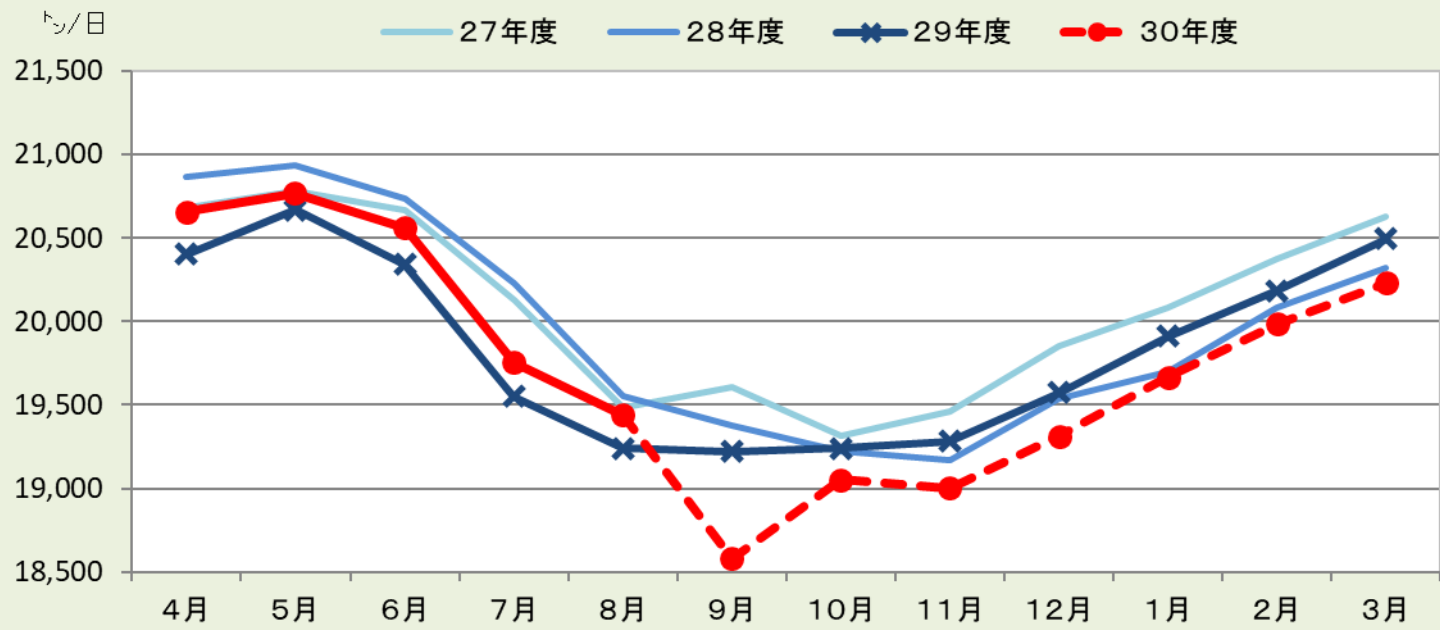
【用途別処理量の見通し】

30年度の用途別処理量は、「生乳供給量」が7,208千トン・前年比99.5%、「飲用等向処理量」が4,086千トン・同100.3%、「乳製品向処理量」が3,123千トン・同98.6%となる見通しである。

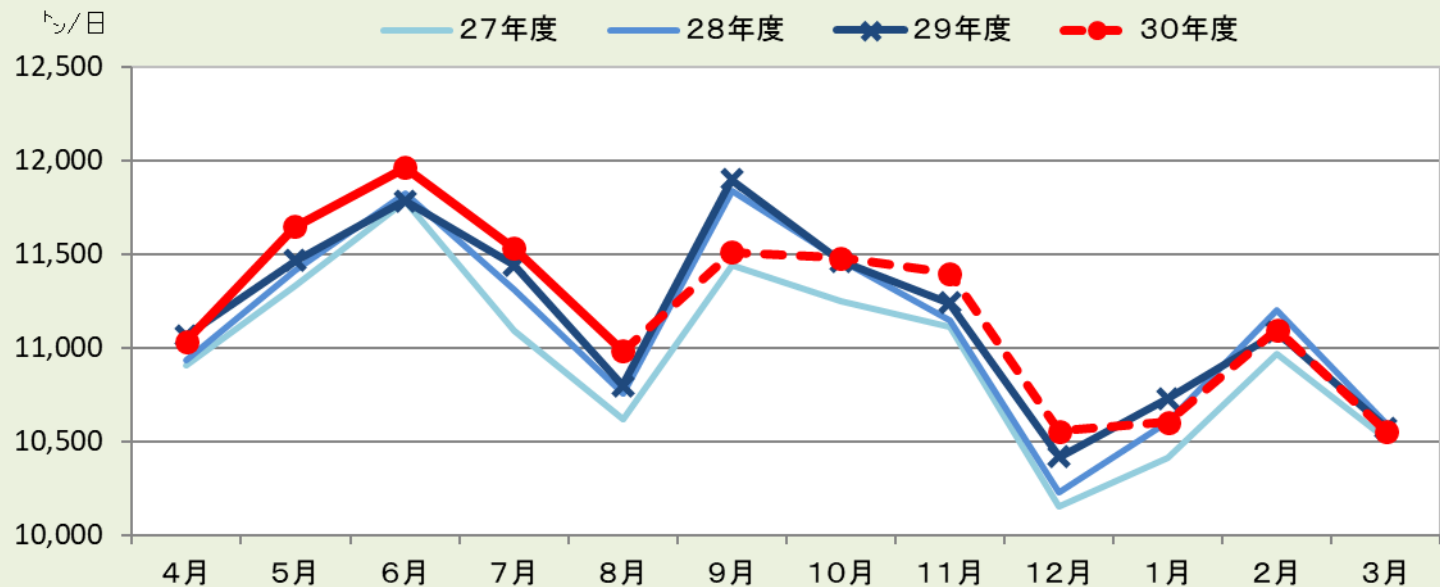
なお、「乳製品向処理量」は下期以降、飲用等向が堅調ななか、生乳生産の増産が一巡したことにより、前年を下回り推移する見通しである。

※生乳供給量 7,208千トン・99.5%（前回7/27見通し 7,218千トン・99.7%）
飲用等向 4,086千トン・100.3%（同 4,105千トン・100.8%）
乳製品向 3,123千トン・98.6%（同 3,113千トン・98.3%）

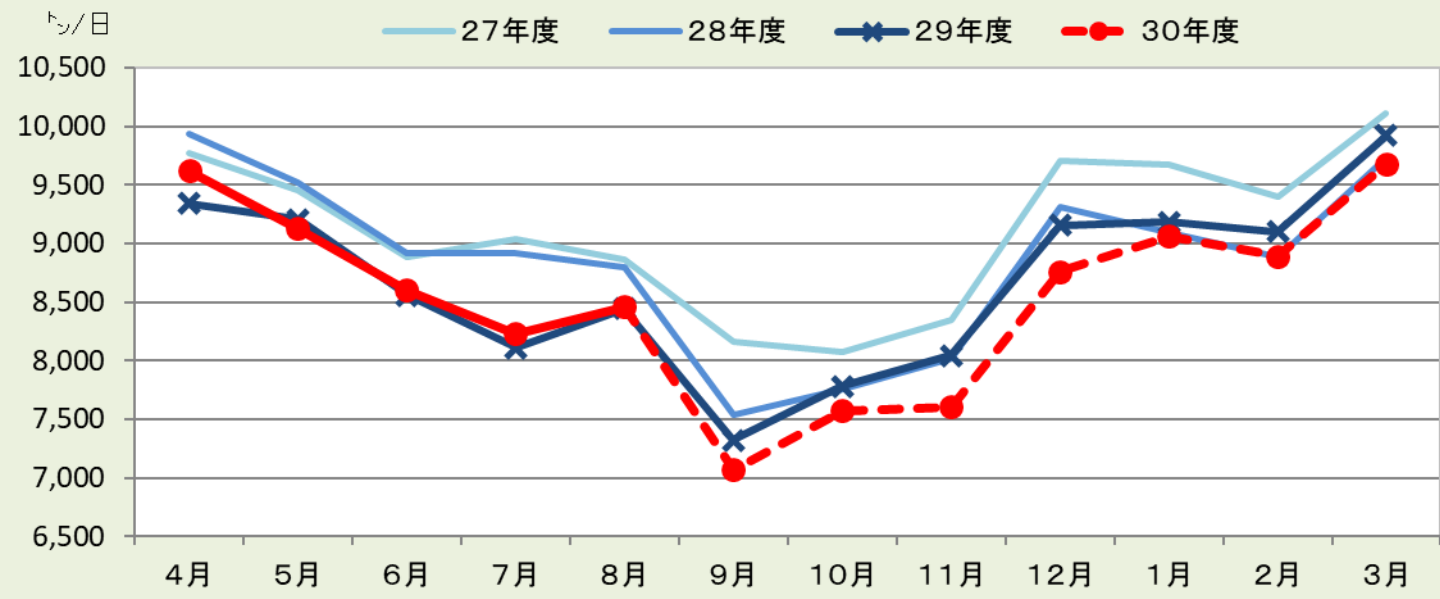
グラフ3-1：生乳供給量（日均量）



グラフ3-2：飲用等向生乳処理量（日均量）



グラフ3-3：乳製品等向生乳処理量（日均量）



4. 都府県の生乳需給の動向

【都府県生乳需給予測の前提】

- ・「移入量（道外移出量）」は、都府県不足量の補完と、北海道ブランド牛乳製造のための必要乳量等を基本に算出。
- ・「脱脂粉乳・バター等向処理量」は、「A-B-C」+「移入量」-「移出量」で算出し、過去5年間の最低数量や直近の需給状況等を加味して算出。

表4：平成30年度の都府県の需給（見通し）（千トン）

	生乳供給量		飲用等向 処理量		生クリーム等向・ チーズ向		A-B-C	移入量 （道外移出量）D		脱脂粉乳・ バター等向	
	A	前年比	B	前年比	C	前年比			前年比		前年比
4月	292	99.5%	280	101.2%	13	84.9%	-1	27	107.2%	26	98.0%
5月	299	98.6%	307	101.5%	10	92.7%	-19	37	117.5%	18	88.6%
6月	278	98.0%	305	101.4%	11	103.9%	-38	48	125.0%	11	96.7%
7月	269	97.4%	300	100.2%	11	111.1%	-42	52	119.3%	10	96.5%
8月	265	98.8%	286	102.3%	11	92.3%	-32	49	119.3%	16	96.8%
9月	259	98.1%	293	97.2%	10	102.8%	-45	49	92.5%	5	90.2%
10月	268	98.2%	302	99.8%	11	99.2%	-44	52	106.5%	8	90.5%
11月	261	98.3%	291	100.1%	10	98.9%	-40	46	110.0%	6	95.2%
12月	273	98.2%	276	99.8%	12	98.1%	-15	39	107.7%	24	96.0%
1月	279	98.4%	279	98.2%	10	99.3%	-10	34	100.6%	24	104.7%
2月	257	98.7%	264	99.5%	9	99.6%	-16	33	105.2%	17	99.8%
3月	290	97.7%	275	99.6%	12	98.8%	3	27	102.2%	30	86.6%
第1四半期	869	98.7%	893	101.4%	34	92.7%	-58	112	117.8%	55	94.5%
第2四半期	793	98.1%	879	99.8%	33	101.5%	-119	150	108.9%	31	95.6%
第3四半期	802	98.2%	869	99.9%	33	98.7%	-100	137	108.0%	37	94.7%
第4四半期	827	98.3%	818	99.1%	31	99.2%	-22	94	102.6%	71	95.3%
上期	1,662	98.4%	1,772	100.6%	66	96.9%	-177	262	112.5%	85	94.9%
下期	1,629	98.2%	1,687	99.5%	64	98.9%	-122	231	105.8%	109	95.1%
年度計	3,291	98.3%	3,459	100.1%	131	97.9%	-299	492	109.3%	194	95.0%

【都府県の生乳需給の見通し】

30年度の都府県の生乳需給は、「生乳供給量」が3,291千トン・前年比98.3%、「飲用等向処理量」が3,459千トン・同100.1%となる見通しである。

北海道胆振東部地震や複数の大型台風の影響に伴い、9月の北海道から都府県への「移入量（道外移出量）」は49千トン・同92.5%と、前回見通し（60千トン・同113.0%）から大きく減少した。年度計では、492千トン・同109.3%となる見通しである。

※生乳供給量	3,291千トン・98.3%	（前回7/27見通し	3,274千トン・97.8%）
飲用等向	3,459千トン・100.1%	（同	3,460千トン・100.1%）
移入量（道外移出量）	492千トン・109.3%	（同	498千トン・110.8%）

5. 乳製品需給の動向

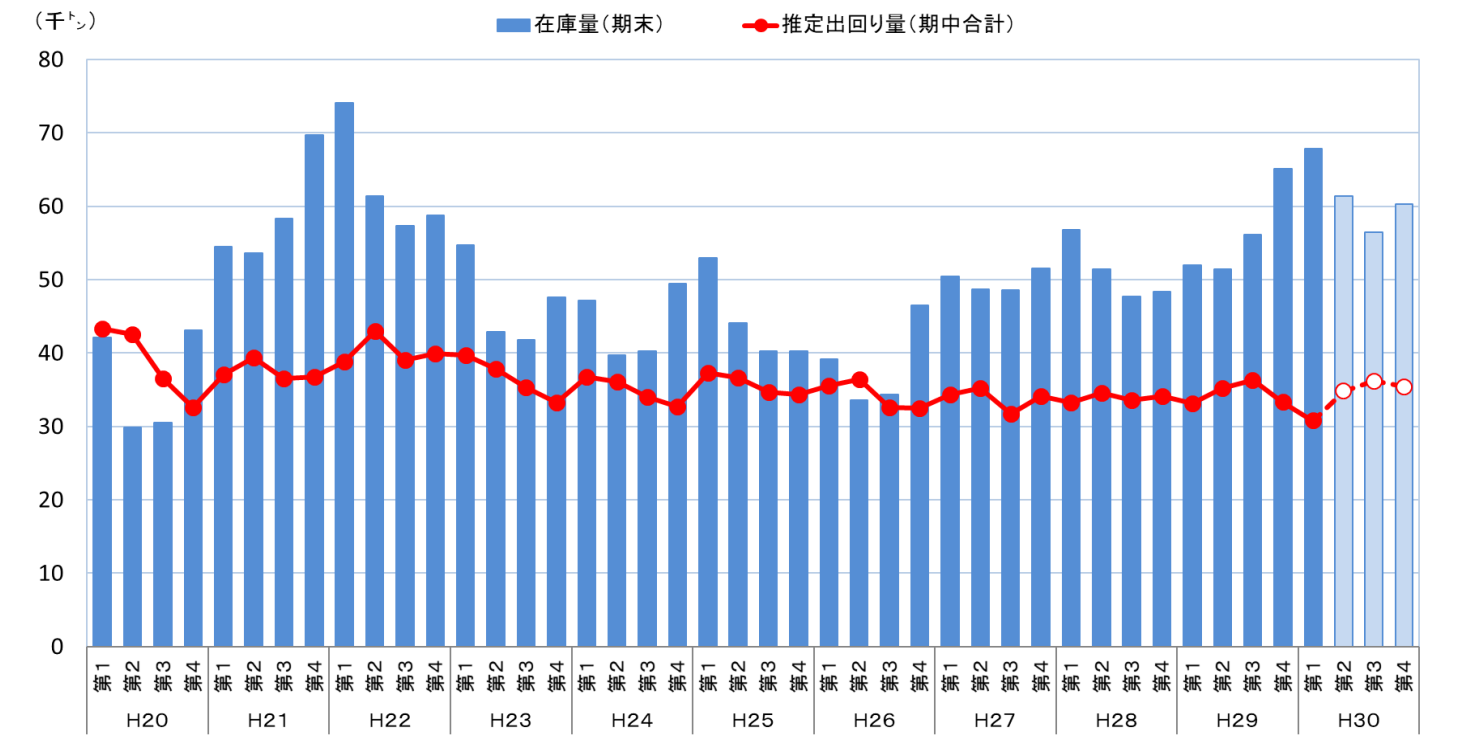
【脱脂粉乳・バター需給予測の前提】

- ・脱脂粉乳・バターの生産量は、脱脂粉乳・バター等向処理量に製造係数（直近の動向等を反映）を乗じて算出。
- ・脱脂粉乳・バターの推定出回り量は、平成30年8月までの推定出回り量データに基づき、代替乳製品の動向等を説明変数とした予測モデル（ARIMAモデル）による推計値を基本に算出。
- ・脱脂粉乳・バターの在庫月数は、前年度の一ヶ月平均消費量を基に算出。

表5：平成30年度の脱脂粉乳の需給（見通し）（千トン）

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B+C-D	前年比
第1四半期	65.1	134.7%	32.1	98.3%	1.4	67.8	5.9	130.4%	30.8	92.8%
第2四半期	67.8	130.4%	25.3	100.0%	3.1	61.4	5.3	119.4%	34.8	98.8%
第3四半期	61.4	119.4%	26.7	88.2%	4.6	56.5	4.9	100.7%	36.2	99.6%
第4四半期	56.5	100.7%	33.1	99.1%	6.1	60.3	5.2	92.6%	35.4	106.3%
上期	65.1	134.7%	57.4	99.1%	4.4	61.4	5.3	119.4%	65.6	95.9%
下期	61.4	119.4%	59.8	93.9%	10.7	60.3	5.2	92.6%	71.6	102.8%
年度計	65.1	134.7%	117.2	96.4%	15.2	60.3	5.2	92.6%	137.1	99.4%

グラフ5：脱脂粉乳の推定出回り量及び在庫量（四半期毎）



【脱脂粉乳需給の見通し】

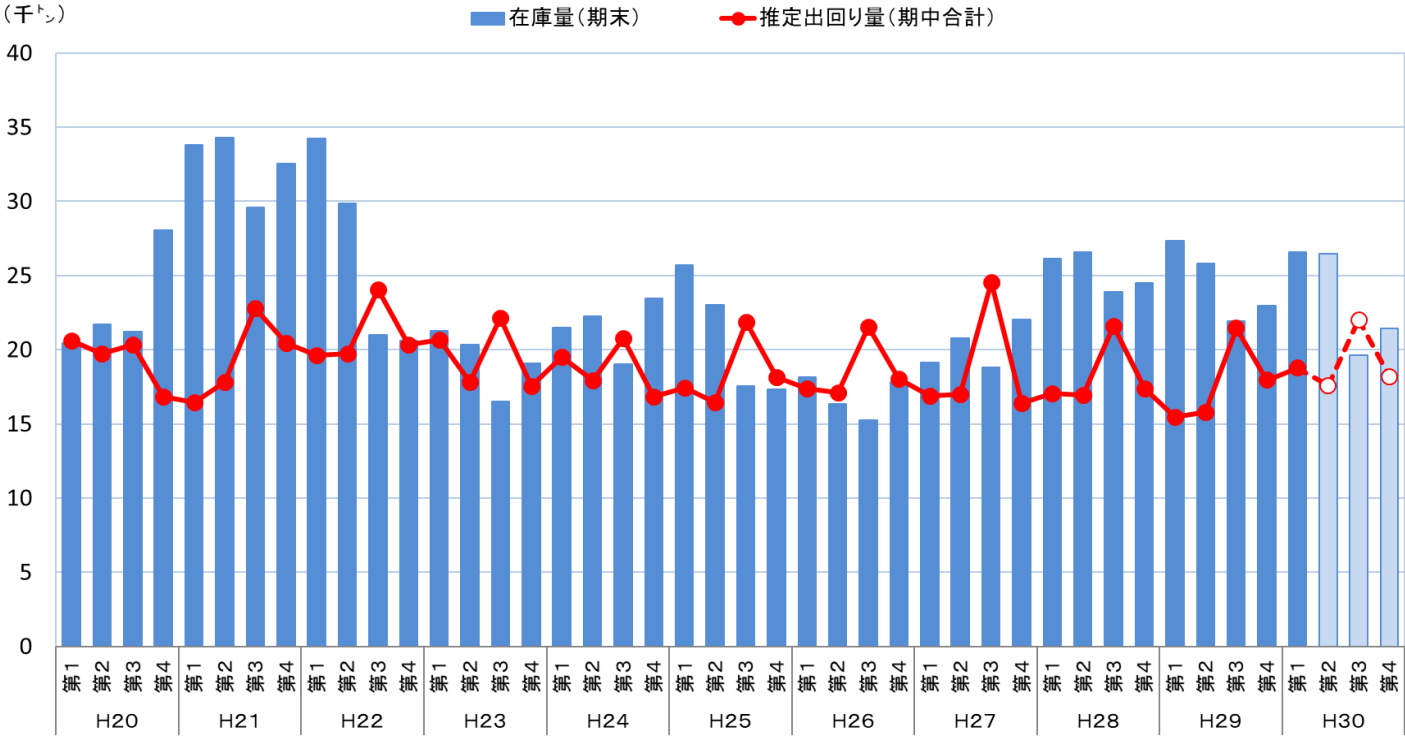
脱脂粉乳については、30年度の実生産量が117.2千トン・前年比96.4%となる見通し。輸入売渡しとして、今後30年度輸入予定数量（27.0千トン）について、需給に対応した必要量が定期的に売り渡される予定となっていることから、30年度末在庫量は60.3千トン（前年度末比▲4.8千トン）となる見通しである。

※生産量	117.2千トン・96.4%	（前回7/27見通し	116.8千トン・96.1%）
年度末在庫量	60.3千トン・92.6%	（同	60.0千トン・92.1%）
推定出回り量	137.1千トン・99.4%	（同	138.7千トン・100.5%）

表 6：平成 3 0 年度のバター需給（見通し）

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B+C-D	前年比
第 1 四半期	23.0	93.9%	16.6	99.1%	5.7	26.6	4.5	97.2%	18.8	121.2%
第 2 四半期	26.6	97.2%	12.9	102.7%	4.6	26.5	4.5	102.6%	17.6	111.3%
第 3 四半期	26.5	102.6%	12.3	91.1%	2.9	19.6	3.3	89.5%	22.0	102.7%
第 4 四半期	19.6	89.5%	17.1	99.1%	2.9	21.4	3.6	93.3%	18.2	101.2%
上期	23.0	93.9%	29.5	100.6%	10.3	26.5	4.5	102.6%	36.4	116.2%
下期	26.5	102.6%	29.4	95.6%	5.8	21.4	3.6	93.3%	40.2	102.0%
年度計	23.0	93.9%	58.9	98.1%	16.1	21.4	3.6	93.3%	76.6	108.3%

グラフ 6：バターの推定出回り量及び在庫量（四半期毎）



【バター需給の見通し】

バターについては、30 年度の生産量が 58.9 千㌧・前年比 98.1%となる見通し。輸入売渡しとして、今後 30 年度輸入予定数量（13.0 千㌧）について、需給に対応した必要量が定期的に売り渡される予定となっていることから、30 年度末在庫量は 21.4 千㌧（前年度末比▲1.6 千㌧）となる見通しである。

※生産量	58.9 千㌧・98.1%	（前回 7/27 見通し	58.0 千㌧・96.5%）
年度在庫量	21.4 千㌧・93.3%	（	同 25.9 千㌧・112.5%）
推定出回り量	76.6 千㌧・108.3%	（	同 71.8 千㌧・101.5%）

6．需給動向を踏まえた当面の課題と対応について

（１）当面する生乳生産への北海道胆振東部地震等の影響及び今後の課題について

9 月 6 日に発生した北海道胆振東部地震により、道内全域で停電が発生し、大半の生産者・乳業メーカーにおいて、搾乳作業、生乳集荷業務、工場の生乳受入・製品製造が滞り、生乳廃棄や工場での仕掛品・製品の廃棄が発生し甚大な被害を被った。

そのような状況のなか、北海道内の生産者、農協、乳業メーカー、ホクレン等の懸命の努力により短期間のうちに平時の集荷体制への復旧が行われたことや、国および酪農乳業関係者が一体となって、迅速な情報共有や対応に努めた結果、需給上の混乱は最小限度に留めることができた。

なお、北海道の生乳生産について、乳房炎による牛体へのダメージの影響が心配されていたが、9 月下旬以降のホクレンの受託乳量（速報値）によると前年同期を上回る水準まで回復しており、全道的にはその影響は限定的となっているものと推測される。ただ、今後は、不作となった本年度産の牧草・デントコーンへの自給飼料の切り替えが進むため、それらの生乳生産に及ぼす影響について注視が必要である。

また、近年にあっては、猛暑、台風、集中豪雨、暴風雪などの異常気象、さらには大きな地震が頻発しており、その都度発生地域へ大きな被害をもたらし、生乳の需給や牛乳乳製品の流通への影響も少なくない状況が続いている。こうした状況を踏まえ、引き続き、国内の生乳及び牛乳乳製品の需給と流通の安定を確保するため、今後は、従来にも増した災害への備えや、緊急時の協力体制の構築について、酪農乳業関係者が一体となり検討していく必要がある。

（２）飲用等最需要期の安定的な需給調整にかかる課題の整理について

現在の生乳及び牛乳乳製品の需給については、生乳生産が前年を下回って推移する中で、引き続き、飲用等向生乳需要が堅調であること、また、バター等の需要期を迎えることから、牛乳乳製品の多様なニーズに対応したバランスのとれた需給調整を進めることが重要となっている。

また、都府県の生乳生産は、暑熱事故の防止の取り組み効果などにより前回見通しよりも減産幅が縮小していることや、乳用牛の 0 歳（0～11 ヶ月齢）頭数が前年を超えるなど、今後に期待が持てる明るい材料が徐々に出てきているものの、当面は減少基調が続く見通しである。こうしたことから、都府県の飲用等向生乳の需給は、北海道からの広域流通生乳へ強く依存する構造が暫くは続くことが想定される。

なお、牛乳類は保存可能な期間が極めて短く、その原料である生乳を毎日途絶えることなく供給することが必要であるため、今後も台風や地震等の発生によっては、ミルク・サプライチェーンへの影響は避けられない。こうした中であって、飲用等向生乳の供給における特定地域への依存は牛乳類の需給を不安定にすることから、都府県の生乳生産を如何にして増産に転じさせるのか、また、特に需要期における飲用等向生乳及び牛乳等の供給や、需要に対応した国産乳製品の供給を如何に安定的に行うのかについて、課題の整理と対策の検討を改めて行うことが必要である。

（３）乳製品安定供給への取り組み

北海道胆振東部地震の影響により大きな減少が危惧された北海道の生乳生産が、ほぼ前年並みで推移する見通しであることから、脱脂粉乳・バターの 30 年度生産量については、前年を下回って推移するものの、前回見通しと同程度の数量が見込まれる。また、30 年度の輸入予定数量（脱脂粉乳 27 千㌧、バター13 千㌧）については、乳業メーカーの努力や需給変化に対応した必要量が定期的に売り渡されることから、今後の乳製品需給は安定して推移する見通しである。

なお、国及び酪農乳業関係者は、当面の生乳生産の状況に注視しつつ、これからの乳製品需要期に向け、市場に対して適時的確な需給情報の提供に努めることが必要である。